

ルエンゾリ登頂 (二〇一二年二月二日～二七日) 栗本俊和……………1	高橋健治・ローゼ夫妻と 娘エリザベスさんのこと 斎藤清明……………8	私の京大山岳部 一九六〇年代を中心に (連載・第三回) 吉野熙道……………9	図書紹介 「梅棹忠夫―未知への限りない情熱」 藍野裕之著 平井一正……………23	AAACKニュース……………23	事務局報告……………24	会員動向……………24
--	--	---	---	------------------	--------------	-------------

ルエンゾリ登頂

(二〇一二年二月二日～二七日)

栗本俊和

経緯

ルエンゾリについて最初に読んだ文献は、深田久弥「世界百名山」でした。その中にルエンゾリ発見から初登頂に至る話、日本人で最初に登ろうとしたのが今西錦司先生であったこと(登れなかった)などが書かれていた。

アフリカで氷河のある山はキリマンジャロとケニア山とルエンゾリの

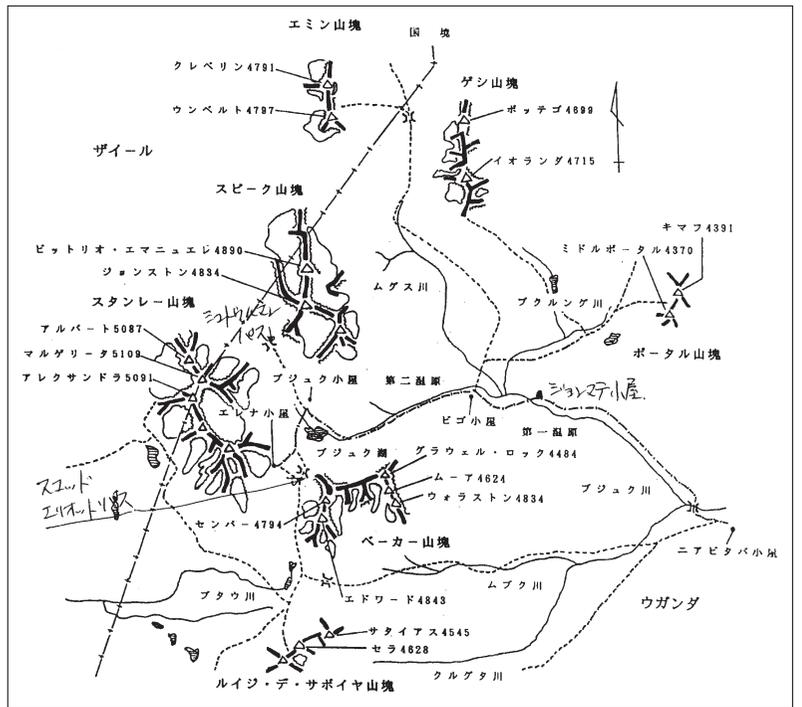


写真1 右マルゲリータ峰(5109m)、左アレクサンドラ峰(5091m)、その左スタンレー氷河からアレクサンドラ東南稜を一旦下り、右のマルゲリータ氷河を登りつめ最後にその右の岩稜に取りつき頂上に達する変化に富んだルート。

三山で五〇〇m以上の山と一致する。キリマンジャロは簡単に登れるが、ケニア山とルエンゾリはそうではない。

昨年二〇一一年一月に(株)アドベンチャガイズのツアー隊が登りに行ったが、頂上直下で引き返し登れなかったのをブログで読んだ。その写真を見ると岩山で氷河に囲まれて面白そうなる山であると思った。次なる目標をこの山に定めるとき、ツアーで人が集まる山でないで、少人数の個人手配で行こうと思った。そこで声をかけたのが一〇年前のアコンカグア以来付き合いのある島田智恵子さん(二〇〇五年エベレスト登頂、セブンサミター)で、そ

して、そのお友達の滝口清美さん(二〇〇九年エベレスト登頂、セブンサミター)を加えて、三人の登山隊ができた。手配は昨年ツアー隊を出して現地の状況がわかっている(株)アドベンチャガイズに依頼した。登山期間はツアーと同じ内容(但し日本人ガイドはなし)で現地ガイド、ポータ、全食事込み、それに、ジンジャへのナイル源流ツアー一日を加えて一六



ルエンゾリ概念図

日間とした。

ルエンゾリについて

ルエンゾリは、アフリカ中央部のウガンダとコンゴの国境に位置し、紀元二世紀には、ギリシャの大地理学者トレミー（プトレマイオス）が「常に雪をかぶった高い山から流れる水を集めた大きな湖、あふれ出る水はナイルになる」と記し、この山を「月の山」と称し、ナイル河の水源として地図上にその位置

を書き記している。

ルエンゾリ山群は六つの山塊（スタンレー山塊、スピーク山塊、ペーカ山塊、ゲシ山塊、ポータル山塊、エミン山塊）（ルエンゾリ概念図参照）に別れ、約二〇のピークからなり、スタンレー山塊にその最高峰マルゲリータ峰（五一〇九m）があり、アレクサンドラ峰（五〇九一m）、アルバート峰（五〇八七m）と氷河を隔てて並び立っている。

ルエンゾリ山群は、琵琶湖の百倍におよぶビクトリア湖から発生する多量の水蒸気のため年間を通して雨が多く、地元の人々さえもめったにその姿を見ることができない。そのため、「幻の月の山」と呼ばれている。

「幻の月の山」が発見されたのは、一八八八年ヘンリー・スタンレーによってである。アルバート湖の西南岸にいて、偶然ボーイから「塩でおおわれた高い山が見える」と教えられ発見につながった。初登頂は、イタリアのアブルツィ公爵隊で一九〇六年のことです。ちなみに、ルエンゾリの意味は「そこから雨がやってくる場所（山）」、あるいはバコンジヨ語の崩れで「雪の丘」とも言われる。

二〇一二年二月二日

エミレーツ航空で成田を夜の二二時に出発し、ドバイ乗換えでウガンダのビクトリア湖畔に位置するエンテベ空港に翌日の一五時前に着いた。

二月三日

迎えの車で首都のカンパラ市内まで一時間ほど走り、着いたホテルはスピークホテル。古い二階建てのホテルだが高級ホテル、最初はわからなかったが、ロビーに飾られていたビクトリア湖とナイル川とスピークさんを描いた絵画を見てホテルの名前の意味に気が付いた。スピークさんとはイギリスの大探検家ジョン・ハニング・スピークのこと、彼は一八六二年にビクトリア湖の水がナイルに通じることを発見し、スピーク山塊にその名を残している。登山後、ナイル源流ツアー観光でジンジャ／ビクトリア湖に出かけることにしている。

二月四日

カセツセへ向けて出発、フォートポータルまではかなりの距離があり五時間ほどかかり、ドライブインで昼食。車はトヨタのハイエースで、三列座席に三人でゆったりとドライブできた。一六時三〇分頃、カセツセからイバンダ村へ入ったRMS（ルエンゾリマウンテンエアライン）サービス、現地手配会社、ルエンゾリの登山、トレッキングを一手に行っている地元（NPO）の事務所前を通り、一七時前に本日の宿舎のRMSサファ

リーロッジに到着した。

二月一五日

今日からトレッキング開始で、登山期間は七泊八日の設定である。ニャビタバ小屋、ジョンマテ小屋、ブジュク小屋、エレナ小屋（ルエンゾリ概念図参照）と一つづつ進め、五日目が頂上アタック、下山に三日を見て、これは一日短縮が可能で隠れた予備日となっている。八日間下山した場合追加料金は発生しないが、一日延びると、一二〇ドルとのことです。ロッジ前からは、六つの山塊の中で一番近いポータル山塊が望める。朝食後、一旦戻る形でイバンダ村のRMSの事務所へ向う。ここでオリエンテーション、ガイドの紹介、荷物の計量などが行われた。個人荷物は一入二五kgまでOKです。ガイドはチーフがNASONI、サブガイドJOMADOで、もう一名JOSEPHという見習いガイドがついて計三名、コック二名、ポータが計一三名の合計一八名、三名の客に対して大編成である。RMS事務所から車でガタガタ道を進み、再度ロッジ前通過して国立公園事務所で入山手続きを行う。入山料も代金に込みになっているので、ドライバーのJACKSONが入山料を払う。一〇時二〇分、登山開始。今日はまだトレッキングシューズでよいとのことであったが、明日以降は長靴との指示であり今日より三名共長靴での出発です。歩いてすぐのところ登山道入り口で、NYAKALENGJIAの看板があり、ルエンゾリの解説案内が書かれている。ブジュク川に

沿って山腹道を歩く。中間地点に休憩ベンチがあり、行動食のランチを食べる。

尾根道を歩き、ちょうど四時間の一四時二〇分にニャビタバ小屋に着いた（二六五〇m）。チーフガイドと荷物は、ポータの集まりと荷物の仕分けに手間取ったようで、かなり遅れて到着した。この小屋では、登頂して下山してきた南アフリカ人やトレッキングで一人旅のベルギー人女性などかなりの宿泊客がいた。新しい小屋に建て変わり収容力も増えている。携帯電話がつながるそうで、電波塔がそばに立っている。

二月一六日

晴れ、小屋を八時一五分に出発し、すぐにムブク川周回コースとの分岐点、ここからブジュク川へ下り、吊り橋を渡る。竹林を抜け、岩場からはスタンレー山塊のマルゲリータ峰、アレクサンドラ峰と氷河が望めた。雨なしで乾いているため、ボグ（湿地帯）もほとんどなくジョンマテ小屋に到着した（一四時〇五分、三三八〇m）。

行動食の他に、小屋に着くと軽食が必ず出た。今日は野菜炒めにチャパティ。個室の部屋は奥に二部屋あり、二段ベッドの五人部屋で、下三ベッドの三人使用で他に登山客もいないと思っていたら、一八時頃に足を捻挫したポーランド人がガイドに担がれて降りてきた。二人パーティで、エレナ小屋下の滑りやすい場所です。事故だけは避けねばならない、我々も注意して、事に当らうと再確認した。

高度の影響か？夕食後腹が張っている。たまたま一袋残っていた柴苓湯（サイレイトウ）を飲んだ。一時間おきに三〜四回トイレに行き、朝には大も出て腹の張りもなく、無事通過した。

二月一七日

ジョンマテ小屋の早朝、ポーランド人の人が人を新型の搬出用タンカーにくくりつけ、七〜八人のポータで運ばれ下山していった。八時頃雨が降りだす。すぐに止んだが徐々に山の天気になつてきた。九時出発、ブジュク川を渡って第一湿原を歩く。ここは木道が一直線に続く道に改良されたため、泥だらけの湿原のイメージはない。

ビゴ小屋は、エミン、ゲシ、ポータル山塊への分岐点にある。第二湿原に入る。ここが湿原の中心地のようなだが、ありがたいことに雨が少なかったのかそれほど潜るところもなく通過できる。もちろんガイドのトレースに従ってであり、踏み外せば潜る。

ジャイアントロペリアやセネシオの林立する少し異様な雰囲気の中、せせらぎに変わったブジュク川を渡渉すると、絶好の休憩場所に着く。一時少し前、ここまで二時間くらいで、中間地点と考えられる。中間地点から一時間ほどでブジュク湖が現われる。湖のまわり第三湿原は第二湿原よりも潜るところが多かった。一三時四〇分、ブジュク湖の先の小高いところにあるブジュク小屋に着いた（三九八〇m）。

休憩後、一人でガイドのJOMADOを連れ

て、シュトウルマンパスの方に登ってみるが、雨が降りだし、高度計で一〇〇mほど登って引き返した。夜半、雨、風、雷が強まる。

二月一八日

前夜は低気圧が通過したのか？雨が断続的に強く降った。もし今日がアタック日なら登頂は無理かな？と思う天気である。同じ日に入山した単独行のイスラエル人の若者はどうしたかな？と思ひ浮かぶ。彼は一日早くブジユク小屋に入り、昨日はブジユク小屋から直接マルゲリータに登る新しいルートに入っているはずだが？

どうも風邪をひいたようで喉が痛い。島田さんからイソジンをもらいうがいをする。ジョンマテ小屋とブジユク小屋では、あきらかに周囲の雰囲気が変わった。四〇〇〇mの高所に来た違いであろう。

ブジユク小屋出発風景では、みんな雨具を着用している。エレナ小屋までは五時間とあるが、三時間少々で行くだろうから九時半出発でよいとのNASONIの指示で、九時四〇分頃のゆっくりとした出発となった。一時間強の登りで峠の展望台に着く。ブジユク湖他が良く見えるが、上は雲で被われていて、ここはスコットエリオットパス方面との分岐になるが、パスの方もよく見えない。峠から少し行ったところから岩場が変わる。苔が付いた滑りやすい岩で、ポーランド人もここで捻挫したようで注意して歩く。この岩場を考えて今日は、長靴から登山靴に変えた。三時間半かかって、一三時一〇分にエレナ小屋

(四五四〇m)に着いた。寒々しい感じの場所です。トイレ小屋は少し離れている。ときおりガスが晴れると、エレナ氷河、サボイア氷河の末端が顔を出す。

二月一九日

前日夕方、一九〜二〇時頃から雪が降りだす。夜半も降り続きトイレのため外に出るたびに雪が増える。一九日早朝四時過ぎ予定の時刻にNASONIが今日のアタックについて相談にくる。「今日のアタックは中止、明日に延期」と伝える。積雪は一〇cmほどある。

前日一八日エレナ小屋に着いた時、小屋にはイスラエル君が一人いた。聞くと、一七日はブジユク小屋から直上ルートで頂上をねらったが無理でエレナ小屋に転進した。一八日は再度頂上をねらったが天気が悪く引き返したと、そして今日が最終アタック日とのこと。結果は今日も天気が悪く下山を決定し、朝八時前にガイドと下山して行った。結局彼にとつては、三日間悪天が続いたことになる。NASONIからは天気が良くなれば、八〜九時に出発しても頂上往復可能だとの話があったが、断った。天気は一時晴れ間も出て上部が見えることもあったが、全体的にはガスでおおわれていた。

一六時頃NASONIとJOMADOが明日の打合せにきた。頂上アタック後、直上ルートを使ってブジユク小屋まで降りる案であったが、これも断った(二〇日ブジユク小屋泊は当初の予定)。我々は明日もエレナ小屋に泊まりたいと伝えた。そのためには燃料他少々

の荷揚げが必要になるそうだが、むつかしい話ではない。

エレナ小屋内では、先着者であったので、三人でゆっくりと泊れた。この日、二パーティーが登ってきたが、二人の外国人ペアーは我々の部屋の裏にある半分ほどのスペースの部屋に入り(話し声をするのみで顔は会わず)。ドイツ人二名隊は下にテントを張った。

二月二〇日(スタンレー山塊概念図参照)

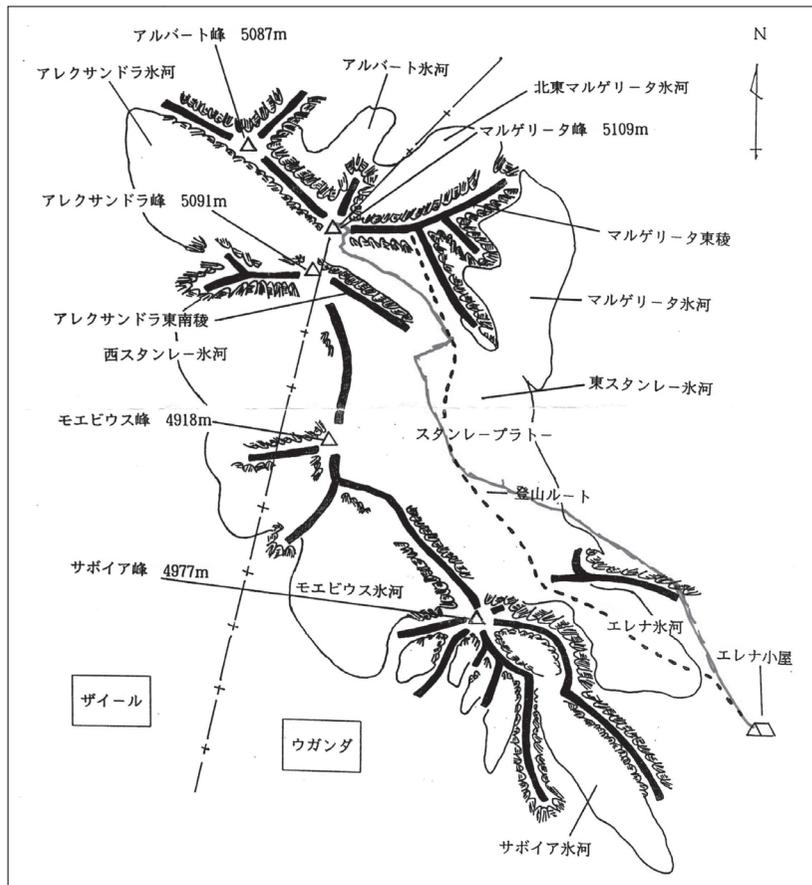
朝四時、小屋内の気温はマイナス五℃。エレナ小屋出発は六時一五分。天気は曇りでガスっている。ドイツ二名女性隊(十ガイド二名)が先に登っていく。ヘッドライトを点けてその後を追っかける形で我々も出発。すぐにフィックスロープがあつたが、ロープをつかんで登る。ドイツ隊を抜き、エレナ氷河を右に巻いた岩稜のコルで小休止、ライトを外す。続いて、岩稜帯の登りが続き、スタンレー氷河に達する。スタンレープラトールを一時間ほど歩いた九時頃、下降点に到達し、アンザイレンに入る。我々三人十三人ガイドの六人縦列である。その間に、ドイツ隊が先行する。マルゲリータ氷河へのこの下降でロープをフィックスし通過するのに、日本隊のガイドも協力しているようであるが先行ドイツ隊がなかなか前に進まない。我々は待たされちようど風も吹き寒さを感じるが先行部の様子がよくわからないのでイライラする情況が続く。どれくらい時間がかったのか、やつとのことでマルゲリータ氷河に降り立つ。その降り立つ部分が、岩と雪面が一mほど空

ており飛び降りる形になる（フィックスロープを張っている）。

マルゲリータ氷河で我々日本隊がやっと先行することができた。ところどころにクレパスがあるが、それほど大きいものではないので慎重に渡る。一二時頃でもまだガスの中で頂上は見えなかった。一二時二〇分頃、突然頂上が見えだす。頂上は近い、元氣が出る。マルゲリータ氷河をつめて最後に右へトラバースに入る。昨年の日本隊が引き返したと

いうトラバース箇所は、それほど問題なく通過できる。後はフィックスロープ帯を登り、岩稜をつめれば頂上に達した。一三時三五分、頂上標識の前に座り込んで記念写真を撮ってもらった（写真2参照）。

MARGHERITA PEAKと標識にあるが、ルエンゾリの山名は、一九〇六年のイタリア、アブルツツイ公爵隊が山塊、山、峠などすべての名前を決めた。この隊はマルゲリータ峰の初登頂のみならず、全部で一五のピークに初登頂している。マルゲリータは当時のイタリア皇后の名前であり、アレクサンドラは当時のイギリス皇后の名前で、ウガンダは当時、イギリス保護領であった。



スタンレー山塊概念図

一三時五五分、ドイツ女性隊の登頂にあわせて頂上を後にした。アレクサンドラ峰だけでなく、我々が通ってきた



写真2 マルゲリータ峰頂上 (5109 m)

スタンレー氷河、マルゲリータ氷河がよく見える（写真3参照）。それにしてもスタンレー氷河からマルゲリータ氷河への岩稜の下降は、氷河が溶けたため毎年のように難しくなってきた。特に今回は前日に雪が降ったので手間取っている。マルゲリータ氷河からブジユク小屋へ直接降りるルートが開発されたのもうなずける。マルゲリータ氷河からは、スタンレー氷河上に、モエビウス、エレナ、サボイアの各峰が望めた。スタンレー氷河への登り返しはフィックスロープにユマーをかけて登った。

スタンレー氷河を下り、岩稜帯に入ったところでパトロールのヘリコプターが飛んできた。一休みして振り返ってみると、いつもは



写真3 スタンレー氷河(上)、マルガリータ氷河(下)、中央の岩稜がアレクサンドラ東南稜

見ることでできない「幻の月の山」が登頂を祝福しまた来いよと言っているように感じられた(写真1参照)。スタンレー氷河からは三人それぞれのペースで下山し、エレナ小屋戻りは一七時三〇〜五五分でした(ドイツ隊は一九時一〇分戻り)。

エレナ小屋に戻ると登山者が増えていた。六〜七人のツアー客?と、二人連れ二パーティ、そのうちカップルの二人が我々のところに泊まるので、マットを移動させて我々は奥に移動した。エレナ小屋は収容人数が少ないので、ツアー客など大勢のグループが入ってくるで大変である。最低二泊すると、どうしても混雑する日が出てくるが、その点、我々は恵まれていた。他パーティが食堂テーブル

を使用しているのので、我々は疲れていることもあり、シュラフの場所で食事を受け取り、簡単に済ませて、就寝した。

二月二日

朝七時頃今日のアタック組は出発したので、朝食を済ませ、荷物を片付け、下山に入る、九時二〇分発、今日はブジユク小屋はパスしてジョンマテ小屋まで下るので、ブジユク小屋を経由しないショートカットルートを行う。ブジユク湖をブジユク小屋と反対側を通ることになる。正面のスピーク山塊も雲におわれ見え、今日の上部の天気もそんなによくないことであろう。第一湿原では雨に降られジョンマテ小屋に到着した、一四時一五分着。NASONIからランチ後打合せをしたと言われた。打合せの内容は、それとなくチップの話であろうと推測できたが、やはりその話であった。まずはエレナ小屋で通常泊以上に一日延泊して努力したことを延々と話し、ポータの数も多く彼らにもそれなりのチップが渡るように考えてほしい、そしてドルを現地通貨に両替して明日の解散時に各自に渡す必要があるから早目に決めてほしいという内容であった。我々は別室で相談した後(形だけで、事前に決めていた)、一人一〇〇ドル、三人で三〇〇ドルをNASONIの前に出すと、ほんとうに彼はびっくりするほどうれしそうな顔をした。すぐにJOMADOを呼び、ポータにも伝わったようだ。その後、お礼のあいさつが、ガイド、コック、ポータからあった。

二月二日

今日はニヤビタバ小屋を経て、ニヤカレンギジャへ下山する。七時四〇分出発、長いニヤビタバまでの道もムブク川との合流の吊橋までくれば、あと一登り、一一時一〇分、ニヤビタバ小屋着。そして、軽食後再出発すれば、二時間からずにニヤカレンギジャに下山した、一三時四五分。公園事務所で無事下山のサインをして、今日の泊りのRMSサフアローロジに着いた。ビールで喉を潤した。ガイド、ポータ達は、チップ支払いの両替した現金が届くまで、ビールを飲み飲み飲み飲んでいた。我々には、衣類、荷物の整理と、久しぶりのシャワーで体を洗うという大事な仕事が残っていた。

二月三日

迎えの車でカンパラまで移動する。フォートポータルでの昼食は、行きに寄ったドライブインでなくもう少し高級なところへ行こうとドライバーに頼み、その名もMountain of The Moon Hotel(月の山ホテル)で、広い庭をながめながらゆっくりと時間をかけてとった。夜暗くなつて、カンパラのスピークホテルに戻った。明日のジンジャ、ナイル源流ツアーの内容とお値段、及び出発時間を決めて別れた。

二月四日

ジンジャへ向う。ジンジャは、一八六二年、イギリスの探検家ジョン・ハニング・スピー



写真4 スピーク記念碑公園からナイル源流を望む

クが、ヨーロッパ人として初めてビクトリア湖が白ナイルの源流であることを発見した場所です。首都カンパラから八〇kmほどの所にあり、現在ではウガンダ有数の工業都市として発展している。オーフェンフォール・ダムによる水力発電はケニアなどに輸出しているし、サトウキビの製糖工場、コットンによる繊維産業、セメント工場などがある。

一〇時すぎにジンジャに着き、すぐにボート乗り場に向う。ボートは三人とドライバーの四人で貸切である。最初岸辺に沿ってビクトリア湖の中の方に進む。木々には種々の野鳥が生息している。湖の方から戻ってきて、ナイル川が流れ出す場所にある島に向う。この島のビクトリア湖寄りに「The Source of R.

NILE Jinja World's Longest River」の看板があり、その左岸寄りに、ナイル川〇m基点のモニュメントもある。川床の傾斜が始まり波だつて水が流れだしている場所が〇m点であり、水が下から湧き出している場所であることも確認できた。ガンジীর遺灰も、世界で一番長い川に流すということ、ここからナイル川に流された(一九四八年)。ナイル川は延長六六五〇kmです。

スピーク記念碑公園というのが対岸にあり、車で行くのかと思っていたがボートで行けるといふことで、次にその岸辺に舟を着けた。丘の上に、スピークの発見したナイル川のことを説明版で書かれていた。ここは美しい公園で、ナイル源流の方の景色もすばらしい(写真4参照)。

二月五日

ホテル前に客待ちしているタクシーを使い、カンパラの市内観光に出かけた。行ったのは、ウガンダ博物館、マケレレ大学、カスビ・トームの三ヶ所。博物館は、ウガンダの自然や文化について一通りの理解ができるようになっていたので有益です。マケレレ大学は、東アフリカ三ヶ国の東大のような地位にあった大学と書かれていて、構内に自由に入らせて若者の雰囲気がかめて、観光地の一つになっている。カスビ・トームは、ブガンダ王国の王の墓所で現在一部工事中であったが、世界遺産にも登録されていて、一見価値あり。ホテルに戻って、昼食はインドカレー料理で。

最後は、今日二五日が島田智恵子さんの還暦バースデーということで、イタリア料理店でケーキ、シャンペンなどでお祝いをして、ルエンゾリ登頂の今回の旅の最後の締めとしました。二六日エンテベ発、二七日成田着で帰国。

感想

結果的には数少ない好天の日になり登頂できた。これは、ルエンゾリが我々を受け入れてくれたものと思っています。ルエンゾリは位置的にヨーロッパからの登山者が多く、日本からはまだ行く人は少ない。これから増えていくのではと思います。しかし、氷河が溶けて、山自体はむつかしくなってきた。少人数の隊がふさわしい。ルエンゾリは、キリマンジャロとは違い独立峰でなく多くのピークをもつ。山の高さではなく、多様性のある豊かな自然に加え雪と岩の織り成す頂上山塊に魅力を感じる山です。

はじめにも少し触れましたが、日本人で最初にこのルエンゾリに登ろうとしたのは、今西錦司先生でした。一九五八年三月のことで(チョゴリザ登頂と同じ年)ゴリラの生態研究の予備調査の途中に立ち寄ったもので、準備不足のため、装備不十分、日数不足などで登れなかった。この時の内容が、今西錦司著「ゴリラ」の中の「ルエンゾリ一月の山」(今西錦司全集第七巻)に収録)に詳しく書かれています。

詳細写真・HP「世界の山・日本の山」
<http://members.jcom.home.ne.jp/tkurimoto/>

高橋健治・ローゼ夫妻と 娘エリザベスさんのこと

斎藤清明

笹ヶ峰ヒュッテ建設（一九二八年）の中心となり、AACCK草創期に活躍した故・高橋健治さん（一九〇三〜四七）のひとり娘のエリザベスさん（七一）が今春、十年ぶりに米国から入洛した。「お母さん（ローゼさん）が亡くなって十年になるので、母の教え子に会ったり、両親ゆかりの小谷温泉を訪ねたり」と。健治さんをほうふつさせる長身で、生まれ育った京都を懐かしんでいた。

高橋健治さんのことは、このニュースレターで第一号（一九九六）から五回連載したので、関心ある方はAACCKのHPでバックナンバーをご覧いただくとして、簡単に触れておきたい。

上京区堀川中立売東入の裕福な古木商の二男に生まれ、母は黒住教開祖の孫にあたる。府立三中から一九二二年、三高に入学。翌年の新学期とともに発足した山岳部で活躍、今西錦司、西堀栄三郎さんとともに「三羽がらす」と称された。京都帝国大農学部に進み、旅行部でも中心メンバーだった。

剣岳の岩登りに情熱を傾け、トップ高橋に今西、西堀でザイルを結び、チンネを初登攀した。北岳パットレスの初登も行った。積雪期の剣岳の開拓にも務め、スキー山行にも熱心だった。

旅行部にクラブ・ヒュッテを作る計画がおこると、資材の調達など、中心になって奔走（エリザベスさんによると、両親からの援助があったという）。笹ヶ峰ヒュッテの名義は高橋健治で、その没後はローゼさんになる。京都大学に移管されるのは、戦後もかなり経てのこと。

関西学生山岳連盟の設立（一九二九年）にも貢献。楽友会館に京阪神十校の代表が集まったの結成の際、趣旨・経過報告をした。京大卒業と同時に、植物学研究のために渡欧。ミュンヘンに居を構え、植物園で勉強のかたわら、というより登山とスキーに打ち込んだ。京都の友人たちへの手紙が、AACCK創立への刺激になる。AACCKの名称も、アカデミック・アルペン・クラブ・ミュンヘンにならったものという。

AACCK創立ちようど一年後に帰国。AACCKの総務となるが、最初のヒマラヤ計画が挫折し、今西、西堀さんらとカラフト落ちを共にする。その後、白頭山遠征にも参加するが、健康がすぐれなかったこともあり、次第に登山からは遠ざかった。

もっぱら、オーストリアから持ち帰ったアールベルグ・スキー術の講師としてスキー界では知られる。長身を駆使し、まるで芸術品だったと私も聞かされた。コーチを依頼されると労をいとわなかったそうだ。スキー術の著書もある。

研究では「日本の森林限界」の学位論文があり、植物生態学の先駆的な研究を行った。また、ローゼ夫人とともに民俗採集の旅を続



けた。しかし、療養生活を送った後、戦後間もない困窮時に亡くなった。ベルリンっ娘だったローゼ・レッセさんは一九二九年、日本旅行に誘われて一人で神戸港に降り立った（誘った友人たちは直前に取り止めたので）。日本についての知識はほとんどなかった。

神戸のドイツ商會に勤務。週末には大阪で医者や学者にドイツ語を教え、持ち前の好奇心で神戸や大阪の街をよく歩き、一九三〇年代初めの光景をカメラで記録した。

三二年夏の休暇で北海道旅行中に、カラフト遠征登山の高橋さんと知り合い、日本に留まることを決めた。翌年結婚、京都・北白川で暮らす。

夫妻でよく旅をした。ローゼさんは小谷温泉など、雪国などで民俗調査を重ね、古きよき日本の理解者だった。越後の雪の暮らしを記録した江戸時代の鈴木牧之著『北越雪譜』を戦後に英訳と独訳し、知られざる日本の雪国を世界に紹介。台風についての著作や詩集で日本の自然や暮らしを綴ってきた。

戦中には京都で、朝鮮半島などアジアから

の苦学生の世話もよくした（MKタクシー会長もそのひとり）。健治さん死去後、ローゼさんは五〇年、法政大の初の外国人教師となり、日本大学でも教えた。戦後はやくから国際相互理解のために「与えることは生きることです」をモットーに非営利団体の「モアジョイ」を創始して活動。日本からインドの子供たちへの「友情の手紙」を集めて訪れるなど、子供たちを伴って世界各地へ親善旅行も行い、今も慕う教え子が多い。

ニューズレターに健治さんのことを執筆時にはローゼさんは健在で、川崎市の借家に住びたび伺ったのだが、二〇〇二年一月二二日に亡くなられた。九三歳だった。二十一歳で来日して以来、日本をじっくりみつめ、翻訳や慈善活動など国際交流に貢献。教え子や米

私の京大山岳部

一九六〇年代を中心に

（連載・第三回）

吉野熙道

岩魚

黒部や東北の奥深くの厳しい沢登りも面白かったが、日高や東北、黒部湖の沢での岩魚釣りも楽しんだ。山岳部での伝説では、日高や知床の岩魚はちり紙を針に付けても釣れるくらい多いのだということだった。それはかなり眉唾だったが、たしかに簡単に釣れた。八久和川などでは四〇cm級の大物がすぐ釣

国から駆けつけたエリザベスさんに見守られて文字通り日本に骨を埋めたのだった。

墓はいらない、遺灰を好きだった雨飾山にまいてと遺言。夫妻がよく訪れた小谷温泉・山田旅館の当主（スキー選手）によって、山にまかれた。また山田旅館には記念の資料室も設けられた。

エリザベスさんは日本の小学校を終え、インターナショナルスクールを経て、一七歳で米国へ。教員として長く勤めた。リタイアし、カリフォルニアで暮らしている。

幼い頃暮らした北白川別当町のことをよく覚えているという。「お父さんの遺産の土地もちよつとあるので、また来ます」と、初夏の日本を後にした。

れた。用意していった味噌・オカラ・酒粕、一・一・一の特製の味噌に茸やミズなどの山菜と一緒にくるみこんで持ち帰ると、ちょうど良い加減の味に漬かっているのだった。人にあげると大変喜ばれた。天然ワサビなども一緒にあげられる時は、こちらも最高にうれしかった。

三島にいた時は定期的に南アルプスに入り、荒川源流などで大物岩魚をよく釣った。

京都北山ではすでにそれほど多くの釣果は望めなくなっていたが、アマゴ釣りを楽しんだ。米と味噌だけを持って峠を上がり降りしながら、カジカの声を聴いて何日もほつつき歩いては、峠を越えた小さな盆地の村に泊

めてもらった。ここぞと思う小沢の流れ出しで釣ったアマゴの姿と味はなんととも言えなかった。岡山の県北の沢でも、アマゴがかなり釣れる沢があった。今ではもう無理だ。

利根の源流から平ヶ岳に登った。広い頂上は「タンボ」と呼ばれる池塘が一面に点在する別天地だった。奥只見に向かって北に下りて行つた。広い谷底に春楡の大木がそびえていた。地上何メートルもの高い幹に鉈で「なんのだれがし、いついつ熊うちに入る」とやたらにたくさん刻み付けてあった。岩魚を釣つてきげんよく下がっていったが、どうも様子がおかしくなってきた。ひたひたと水の中を歩く状態が続き、道は完全に水没してしまった。これ以上は進めなくなった。下では奥只見ダムが建設中であることは知っていたが、湛水開始はまだまだ先だと聞いていたのだ。しかしどう見てもこれはダム湖の最上端であるとは思えない。ダムサイトまで湖の水際を歩くとすると、沢筋ごとにひどい遠回りをしなければならず、一体どれほどの時間がかかるかわからない。絶望的だ。ガックリきた。それでもどうにか気を取り直して歩き出した時、突然、「おめーら、こんなところでなにしてるだ？」と声がかかった。継ぎはぎだらけの服と綿入れチャンチャンコを着て「ジョイコ」をかついだ年寄りが立っていた。どこから湧いてきたのかわからなかったが、天の助けだ。事情を説明した。「じゃ、ついでこい。もうちょい先に船が来るはずだから」と言う。わー、助かった！その老人の方言がひどくてなかなか聞き取れなかったが、根曲

り竹の筍を採りに来ていたらしい。しばらく待って、迎えに来た小さなモーターボートに乗ってダムサイト近くの仮橋に着いた。ダムはほとんど全部完成していたのだ。京都に帰ってからお礼にお菓子でも送ろうと思ひ、別れしなに住所と名前を書いてくれるよう頼むと、モジモジして書いてくれない。聞き取れなかったのかと思つて、ゆっくり頼み直す、「わしやーむひつでのー」と言う。なんのことか？でもやつとわかつた。「無筆」、つまり字が書けないのだ。びっくりした。かうじて自分の名前だけはほんとの金釘流で書いてくれた。住所は棧橋にいた人が聞き取つて書いてくれた。一九六六年の日本の山にはまだこういう人がいたのだ。貴重な経験だつた。彼の名前は常任次郎ジョウニンシロウさんだつた。

これらの山行は北海道や只見以外ほとんどすべて単独行であつた。そもそも私は浪人時代の山行、現役時代の北山歩き、卒業後の沢登りはたいがい単独行だつた。私は毎年数回は必ず単独行をするよう心掛けていた。もちろん単独での沢登りは、滑つて捻挫などしてすぐ大事に至るので危険なのだが、逆にその緊張感と、いわゆる「山勘」が研ぎ澄まされる快感には勝てなかつた。

熊

日高や北海道奥地の山に行くとき、沢を登つて最後は、小さな吸血昆虫のヌカに悩まされつつ、根曲り竹とナナカマド、ダケカンバ、這い松のヤブ漕ぎをしては、獣道を使つての尾根越えになる。そんな峠やカールの中など

では、大きな熊のウンチが待ち構えていることが多かつた。時にはまだ湯気を立てているホヤホヤの新品さえあつた。そんな時は豆腐屋のラップやホイッスルを吹き鳴らして、熊に警告してからでないと峠を越せない。

私は現役時代よく熊に遭遇した。おそらく同年代で最も多かつたのでなからうか。中でも一番ヒヤヒヤしたのは北海道中央高地、大雪山のカールの中でテントに寝ていた時だつた。夜中にふと目が覚めた。何かおかしな雰囲気を感じた。耳を澄ますと、外でフーフーという少しかすれたような音がしている。一瞬、なんだ？とわからなかつた。うわっ！ヒグマだ！ヒグマの鼻息だ！恐怖に駆られて体も心も凍りついた。熊がテントの周りを歩き回っている。草の根茎などを掘つて食っている気配だ。他の三人は白河夜船。ガサガサ寝返りを打つたり、何かブツブツ寝言にもならない声をもらしたりする。（こら、しずかにしろ！）こつちは必死だ。それにしても人間は寝ている時こんなに騒がしい動物などとは知らなかつた。外の熊よりうるさい。シュラーフのチャックをソーロと引き下ろしていった。ズボンのポケットに入れてあつたナイフを取り出してじわじわと刃を開いた。それを両手で構えて、とにかくじつとしていた。もし食料の臭いに気付いてテントに踏み込んで来たらどうしよう。熊の嗅覚はとても鋭いぞうだ。動いたら自分がまっ先にやられるぞ。ナイフなんか何の役にも立たないだろう。誰かが犠牲になるまで黙つて我慢できるだろうか？自分より先の友の死を願う？そんなこと

を考えている自分に、いつ時、愕然とした。お前、そこまで情けない人間だつたのか？情けないことではあつたが、正直言つてそれでもしやーないやんけと思つた。

どのくらい経つたかわからない。音はしなくなつたが、最初から足音などはしていなかったから、鼻息が聞こえなくなつたといつても油断はできない。ちよつと離れただけなのかもしれない。

いつの間にか、外は白んできた。そつと起き上がった窓から外をうかがつた。大丈夫のようだが、ほつとして皆を起こして状況を話したが、誰も信用してくれない。外に出て熊の痕跡を探したが、テント地設営の際に皆が踏み荒らしているのが、熊の掘つた穴や足跡などはわからなかつた。「夢を見たんやろ」などと嘲笑されて怒りまくつた。

朝食後、メンバーの一人がグロス（大というドイツ語で、大便、ちなみにクライン、小は小便）から泡食つて飛んで帰ってきた。ズボンもまだ引き上げずに手で押さえている。「クマ、クマ」と顎をがくがくさせている。用を済ませて立ち上がるとちよつと先で熊が彼を見ていたという。それ見る。ザマ見る！さつき笑つたのはどこのどいつや。思ひ知つたか、と溜飲を下げた。

下山後、北大博物館入口にある檻の中の熊を見た。その頭のでかいこと！赤っぽい小さな目の陰險なこと！これほどだとは思わなかつた。その上、撃ち殺された熊の胃から取り出された、丸かじりにされた幼児の手や足のフォルマリン標本があつた。入山前にこれ

らを見てなくてよかった。見てたら、あの夜の恐怖は何倍もであったにちがいない。また数年後、同じ大雪山の小屋周辺で数人の登山者が罷に食い殺されたニュースが流れた。

ドイツ語

登山とは直接の関係は薄いのだが、私と山岳部との関係から言えば大変重要なことであったので、ドイツ語について少し。本当は恥ずかしくて書きたくないのだが、ええかっこうばかりしてもいられないので敢えて書くことにした。

私たちの時代の第二外国語はドイツ語かフランス語であった。私はドイツ語で、教養の単位は問題なく取れた。四回生夏の大学院入試は専門科目と語学の試験で、英語以外の第二外国語は辞書持込み可だった。これがかえって災いしたと思われることがあった。一語だけ、どうしても文脈が繋がらない単語があった。時間切れ近くなってやつと、あ、これは名詞じゃなくて人名なんだ、と気がついた。知つてのとおり、ドイツ語では英語と違ってすべての普通名詞も固有名詞も大文字で書き出される。ドイツ語の試験だから、大文字だからつい普通名詞だという先入観が勝ってしまうのだ。気が付いてよかった。一気呵成に答案を書き上げた。後で聞くと、ずいぶん多くの人間がこれに気付かなかったそうだ。おかげで私はパスした。合格人数は一研究室あたり二人平均だったが、この年は余裕があり、遺伝学は私を含めて三人が合格し、一人は不合格で彼は一年間浪人した。それにしても

ドイツ語は不便な言葉だ。

六回生の最後の春山では私がリーダーのパーティーも成立した。

三日間こたつに入つての完全徹夜で、締切日になつても必死に卒論を清書していた。心配した同回生が手伝いに来てくれた。締め切り時間を少し過ぎてからやつと教務係に提出できた。発表も無事済んだ。さあ春山だ、と準備にかかった。

しかしとんでもない暗転！教務係から呼び出しを食らった。「外書購読の単位が取れていないから卒業不可」との宣言だった。泡をくった。就職も決まっているのにどうしよう!!あわてて先生に相談し、担当の先生に掛け合つてもらつたが、「どうしてもダメ、たつた三回しか出席してない」と叱られた。事実だった。弁解のしようもない。実は三回生になつて専門に配属された時に、先輩から「外書購読は最初だけ出れば後は出なくても単位はもらえるのさ」と聞いていたので、安心してサボつていたので。私はとにかくサボれるものはなるべくサボる主義だったのだ。ところがこの年だけは先生の方針が変わつたのか、それとも先輩の大げさな言葉を真に受けた自分がよつぽどの脳天気だったのか、今では知る由もないが、とにかく大ピンチだ。

たくさんの人の口添えもあつて、やつと、卒業式直前までにドイツ語の専門書を一冊翻訳する」という条件で許してもらえた。それはなんとかやり遂げられると思つたが、春山になどとうてい行けない。今度は山岳部内で恥をさらしながら、謝つて回つた。パー

ティーのメンバーは他のパーティーに分散して入れてもらつた。山岳部全体に迷惑をかける結果になつてしまった。まったく前代未聞、山岳部始まつて以来の不祥事なのだ。

とりあえずメンバー全員に、なげなしの金と専門書などを売り払つた金で一席設けて、改めて頭を下げた。大学院入試で私がパスして、その代わりに一人の同回生の貴重な一年間を棒に振らせたドイツ語の祟りだったのかもしれない。

私の半生においては数限りない失敗をしてきたが、この事件はそのうちの最大のもので一つであった。今ここに改めて当時の関係者の皆様にお許しを乞いたい。あれから四六年近くも経ち、長いこと黙っていたが、私の心の中ではまだ時効は成立していない。

ガネツシュ初登頂

一九六四年七月〜一九六五年二月⁽³⁾

ここでまた山岳部と私の話に戻る。一九六三年、遭難の間には私は四回生になっていた。卒論実験も始めていたし、八月の大学院入試にも通つた。しかし私は一種のうつ状態で、毎日浴びるように酒ばかり飲んでた。そもそも私はヒマラヤに行きたいから京大山岳部に入ったのだ。インドラサン遠征に際しては、(自分はまだ十分な技術・体力・知識が身につけていないから今回は立候補しない、しかしもう少し鍛えたら必ずヒマラヤに行く)と決めていた。それなのに遭難の後始末だけで山岳部リーダーの任期の半分以上を過ごして、本来の希望も果たさずに卒業する

のか！と思うと、むしろくしゃりするのだった。卒業後にAACKの隊員になって行けばいいのだ、という考えもあるし、その方が確かにまともなのだが、その頃の私は自分の山の實力に大変な自信を持っていた。今が一番脂のりきつている、今ならどんな山でも登れるのに、と我慢ならなかった。

一年以上級の宮木（トク）も卒業前のヒマラヤ行を考えていたので、二人で行けるだけ行こうと決めて、とりあえずネパールからの招待状を取り付けるべく行動を開始した。当時はまだ自由に海外に行くことなどできなかった。相応な理由と旅費・滞在費を保証してもらえなければ、パスポートや外貨割当（為替レートは一ドル三六〇円の時代だった）をもらえなかったのだ。

方々を当たってみたが、そんな保証をくれるような人がいるわけはなかった。宮木は就職が決まってあきらめることになった。それでも私にできる限りの援助を約束してくれた。私は留年して一人で続けることにした。ところが、天理大学に留学中のネパール人が、「実質なしの字面だけのものでよいなら、カトマンズの兄に招待状を書いてくれと頼んであげる」と言ってくれた。もちろんそれで御の字だ！パスポートさえ取れば、わずかも外貨割当をもらえる。あとはとにかく強引に、意気込みと熱意の勝ち。親からの借金は格好悪いがしかたない。なんとかつてを頼んで、わずかな食事代のみでカルカッタまで運んでくれる貨物船も確保できた。少なくとも半年、できれば一年間ヒマラヤ乞食旅行を実

現するのだ。パスポートを取り二〇〇ドルの外貨も買えた。

ところがこの時に至って、部内の空気が変ってきた。最初は「遭難時のリーダーがヒマラヤ？そんなの許されるんか？」という雰囲気でもケンもほろろであった。しかし私が「じゃ、退部して行く」とつぶやいているうちに、「コッペだけではなく、部の活動としてヒマラヤ遠征をしてもええのやないか」との意見が徐々に大勢を占めてきたのだ。やはり多くの部員の心の中には（遭難以後の抑圧されたエネルギーをなんとか発散させたい、しかしそんなこと言えんしなあ）といった葛藤がうずまいていたのだろう。私がそれに火をつけてしまったのだ。大分もめたのだが、結局水曜会は「今度は本格的にネパール・ヒマラヤを狙う、それも七〇〇〇m級を」ということで一致した。酒井敏明（オシメ）さんがインドラサン以来の縁もあって熱心に現役を応援してくれ、山岳部長になっていた小野寺教授の説得はもちろん、隊長探しにも知恵を絞っているいろいろな人に交渉してくれた。京大防災研究所助教授の樋口明生（ジャン）さんに頼みに行くと、即刻「ええ話やなあ」とニヤリ。うれしかった。樋口さんはすぐ研究所の了承を取ってくれて、正式に隊長に決まった。副隊長はAACKの若手Zoniでサルトロ・カンリ隊員でもあった上尾庄一郎さんが引き受けてくれた。隊員は前回同様各回生内での立候補により水曜会で決定された。五回生の吉野、四回生の木村雅昭と島田喜代男（ケロ）、三回生の上田豊（ポッポ）である。

問題は対象の山であるが、初めはダウラギリIV峰（七六一m）が有力で、カンジロバ・ヒマール主峰（七〇四三mとされていた）と競り合ったが、前者の高度、山容の厳しい美しさが後者の未知な点の多さよりも魅力的だった。AACK内にも、カンジロバの長すぎるアプローチは現役向きではないという意見が多かった。IV峰への登山許可が申請された。しかしカトマンズからの情報では、一九五七年のマチャプチャリ登頂の英国隊隊員であったロバーツ氏がすでに同峰へ申請済みであるとのことだった。私たちは急遽、予備の候補に考えていたアンナプルナ南峰（別名ガネツシュ・ピーク、七二五六m、一九九三年のドイツ製地図では七二一九m）に変更して申請した。この山は、フランス隊が人類最初に登頂した八〇〇〇m峰であるアンナプルナI峰（八〇七八m）の南に広がる内院の入口に、マチャプチャリ（六九九八m）と並んで、それよりはるかに大きな山容でそびえている。標高八〇〇mほどしかないネパール第二の都市ポカラの真北にあつて、ポカラを訪れる観光客は必ず写真を撮る山だ。ところが意外なことにこれほど目立つ山なのに、イギリスのマチャプチャリ隊が撮った小さな写真があるだけで、登攀ルートに関する情報は一切なかった。もちろん試登がなされたことはない。キャラバンもわずか一週間ほどだ。とんでもない掘り出し物だったのだ。登山許可はすぐに下りた。私たちの気持は一気に盛り上がった。

全ての準備も整い、ガネツシュ遠征が始

まった。シェルパ五人を雇い、首尾よく一月三日に中央峰、一五日に最高の最南峰の初登頂に成功した。

さらにテント・ピーク（五九四五m、一九九三年のドイツ製地図では五六六三m）初登頂というおまけまで得た。これについてはある事情があった。C4予定地直下には大氷壁があつて、これに乗つ越すのにケロとポッポが丸一日かかった。そこに下から上げさせた木の枝で作った縄梯子を下げたのだ。後でそれを登った上尾さんは「ケロとポッポに熱い接吻を！」と言つて、ニヤリと笑つた。二人はこの後しばらく彼と目を合わせないようにしたという。なにしろこの上尾さんとはどんな大先輩に向かつてても、「そんなこと、一〇〇年前からわかつてまっせ！」と平気で言い放つ自由人なのだ。

ケロはこの時のきついアルバイトによつて持病の痔が出た。大酒と重荷のせいか、山岳部員には痔持ちがとても多いのだつた。ケロもこのために頂上アタックに参加できず悔しい思いをしたのだが、彼の無念さを思いやつた木村がガネスシュ登頂後に、一緒にテント・ピークを登ろうと誘つたのだつた。高度は六〇〇〇mに達しないものの、内院右手奥に目立つヒマラヤ襲の美しい秀麗な山だつた。頂上直下でトップの木村が滑落した。その時ケロが咄嗟にザイルを引き締めて二人とも助かつたという。後に法学部教授となり多数の卒業生を外務省に送り込んで、日本外交の影の立役者である京大名誉教授の木村が、今でもなおケロに頭が上がない理由である。

木村は法学部国際政治学専攻で、そのせいかどうか、理屈と論理にこだわるころがある。その代わり科学技術面にはやや弱く、ケロなどはいつも「だから文科系はだめなんだよ」とこきおろしていた。しかしはたから見ているとこの二人は不思議に馬が合うらしいのだつた。当時法学部の優秀な学生はゼミに入るとすぐに教授に注目されて、学部卒業後すぐに助手に採用され、将来教授の跡継ぎの席を保障されていたらしい。しかし木村はガネスシュ遠征中のカルカタ、ボンベイなどインド各地での見聞から、大英帝国の植民地統治の実態に強烈な印象を受けたようだつた。彼は帰国後、通常のエリートコースに入らずに大学院に進学してから、インド外務省の留学生試験に通つてインド留学をして、英領インド時代の外交史を徹底的に研究したようだ。

ついでに他のガネスシュ隊員の紹介もしておこう。

島田ケロ・あだ名の由来は、一回生の時、テントに帰つてきた時、「わー、のどが渴いた」と言うや否やグビグビとケロシンのタンクに口を付けて飲んだ、しかも一説によるともう一杯飲んだのだという。「ケロ」だけで済んだのは、同回生のせめてもの温情だつたのだろう。彼の馬力は拔群であつた。滝谷遭難の捜索に際して、湊沢カールを登つていた時、いきなり上からの落石が我々のパーティーのど真ん中を突き抜けた。ヒュッという風切り音がして、ケロが倒された。最後尾にいた私が思わず振り返ると、一抱えもある石が空中

をすつ飛んで行くのが見えた。ケロの右腿のズボンが破られ、皮膚がザツクリとえぐられていた。急激なショックのためか筋肉が収斂したようで、出血はしていなかった。応急手当をして、彼に歩けるか？と聞くと、「大丈夫」とのこと。我々は北穂高小屋に急がねばならない。パーティー・リーダーの私は迷つたが、彼に一人で横尾の小屋に引き返して治療を受けるように指示した。後で聞くと、小屋に無事着いてから激しく出血したそうだ。皮膚移植で事なきを得たが、今でも大きな瘢痕となつているそうだ。

彼は工学部高分子化学専攻であつたが、アメリカのシラキュース大学院に留学し、学位を勝ち取つた。彼によると、チキンラーメンばかり食つて実験に没頭したそうで、論文をまとめた時以来、「なぜ早く俺に学位をくれないんだ」と、教授と渡り合つていたらしい。以後アメリカの世界企業に就職し、国際的ビジネスマンとなつた。

彼にはしかし日本語を操る点においては、致命的(?)ともいえる欠点があるらしく、「アカハラハラカニ、セキララカニ、…」などとわけのわからないことを口走るのだつた。英語ならペラペラとしゃべるのに。我々はアメリカ暮らしが長すぎたんだなー、と寛大に許してはいたが。

上田ポッポ・彼は一回生の最初の頃煙草を吸う時、おそらく煙草の味など楽しむのではなく単に嗜好をつけていただけだつたためだろうが、唇を空に向けてポツ、ポツと煙を吐き出していた。「僕は平和の使い、鳩ポッポ

なのだ」などと言うが、それは嘘っぱちだ。誰よりも几帳面で、初めは処女のごとく、後は脱兎の如しを地で行く体力抜群の男だ。ふだんは寡黙で、いるのかわからないのかわからないが、行動に移るとその実行力たるやすばらしいものである。せつかちなケロや私が、何か問いかけても、忘れたところに、「コッペさん、それはねー」などと返事が返ってくることも多く、こっちは「えつ、なんの話や？」などという受け答えになることも多かった。しかもその応答内容は実的確であったのは驚かされたものだ。帰国後に出版した報告書で示された彼の文章力は、隊員中随一のものであった。理学部地球物理学を専攻した彼は、氷河研究の第一人者として、極地・ヒマラヤの調査と研究者養成に活躍することになった。

遠征隊員ではなかったものの、隊にとつて欠かせなかつたのは、田中昌二郎（昌チン）だ。彼は上尾さんと同じく、生粋の京都の町衆の家柄で、京友禅の影の主役である糊を作る会社の御曹司だ。農業経済学専攻で得た経営知識を伝統的な産業に巧みに適応させたようだ。その堅実さと不測の事態に対応する能力は、目立たないながら前後一年以上に渡ってガネッシュ隊のマネージメントを一手に引き受けたことで証明された。彼はまた六歳から観世流の能と謡をたしなみ、毎年平安神宮の京都新能の謡を任される教養人なのだ。ややもすると、過激になりがちな隊員同士の議論をさばく手際は見事なものであった。

上尾副隊長は薬学部の博士課程院生、当時

のAACKにあつては最年少のカラコラム遠征経験者で、しかし、大物かつ曲者ぞろい、屁理屈にかけては誰もが一家言を持つているAACKメンバーの中にあつて、どのような反論・批判にさらされても、ニヤニヤとややつつ一步も引かない見事な合理的精神の強さに太刀打ちできる人間はいなかつた。

最後だが、我が隊長の樋口ジャンさん。いつも丸顔にニコニコと笑みを絶やさない温厚な人だが、決断は早い。大のビール好き。ただしいつも誰よりも先に眠り込んでしまい、しかしまたソノソと起き出して飲み直すのも常のことだった。我々からすると、ほとんど兄貴という感じにつきあつてもらえる隊長さんだった。研究面では、ヒマラヤ登山中でさえ、毎晩海塩核を採集・記録するといふ地道な作業を続け、また一方瀬戸内海の精細な模型を作つて潮流のダイナミズムを解明する緻密さを持つ人だ。

ついでに不肖私コッペは、今や本当に〴〵仏のコッペ様に近づきつつある七一歳、二児と三人の孫を持つ、人畜無害の好々爺なのだ。余談ながら、このメンバーは大変結束が固いのが目立ったせいとか、現在に至るまでガネッシュ組と呼ばれている。

全員がいったんカトマンズに戻り、隊長と副隊長が帰国してから、学生だけが二隊に分かれて、それぞれシェルパ一名を連れただけで、吉野・木村はダウラギリ南面の登路探索、島田・上田はガネッシュ・ヒマール一周の乞食旅行に出発し、十分な成果と満足感を土産に帰国した。日本は東京オリンピックを頂点

とした景気のいい時期だったが、この期を境に東京は全く殺風景で汚い町になってしまった。私はこれ以後東京が大嫌いになってしまった。今上京しても、青山墓地の墓にお参りして草引きをするときだけが落ち着ける。

その後梅棹忠夫先生の指導を得ながら、学生隊員のみ執筆による報告書「ガネッシュの蒼い水」⁽⁹⁾を朝日新聞社の朝日アドベンチャー・シリーズから出版できた。私は卒論実験と時期が重なつたためちよつと大変だったが、先生のお宅でビールやお酒をいただきながらの先生の文章作法実技指導は大変すばらしく、実に楽しいものだった。本は幸いに評判がよく、書評集（「ガネッシュの蒼い水書評集」、ただしこれは本体の正誤表までも含め全一九ページの手帳版、全くの私家版で発行日時や印刷所さえ記載されていない）まで出すに至つた。

剣沢大滝について

ここで、山岳部にとつて重要ないくつかの山行のうち、剣沢大滝への我々の山行およびその登山史的経過と他チームの活動について述べておきたい。

開拓期・冠氏他

黒部と言えはなんといつてもまず冠松次郎氏の名前を挙げねばなるまい。氏は名案内人として知られた宇治長次郎氏をガイドとして黒部溪谷周辺の山々をくまなく探索して、多くの著作を残しているが、その「黒部溪谷」⁽⁴⁾には、六月の「剣岳・大滝・剣沢」と題した

写真があり、「中央の滝は大滝二〇〇米、下の流れは剣沢」と解説され、中央にはつきりと大滝最下段が写っている。これは黒部対岸の棒小屋沢側から撮ったものにちがいない。大滝を写した最初の写真であるだろう。本文中には、大正一四年八月から九月にかけて上廊下を廻行した記録がある。また大正一五年六月七日から室堂、内蔵ノ助平を経て一日黒部別山に至り、剣沢右岸、大滝のはるか上部へ少し下降、一二日も十字峽側に下降を試みているが、それらのいづれにも、大滝最下段が見えたという、上記の写真に関する記述はない。

さらに冠氏は一九二七年八月に別宮氏、岩永氏、宇治氏とともに、十字峽から大滝最下段に達した。「回想の剣沢」にその高さを約五〇mと記した。また、一九二九年六月初旬

には再び岩永氏、宇治氏と剣沢を下降し、雪渓伝いになんなく大滝の真上まで達した（安岡良祐⁹による）。私は現在この両記録の出典については知らない。

また宮木靖雅⁵によると、「冠氏が十字峽上方の東信歩道よりとった写真（修道出版…黒部）に上段と下段の滝が写っているがこの二つの滝は同一方向に走っておりしかもその間にはかなりの高度差があり当然一つあるいは二つの滝のあることが予想される。」とのことである。これは一九六一年二月刊行の報告だから、私はこれを見せてもらったはずだが、記憶がない。宮木はすでに故人であるのでここでは言及できない。

開拓期・塚本氏他一九三一年

次の大滝に関する記述は、塚本繁松…「剣

の大瀑行」⁶であ

る。それによると、

一九二七年夏の新聞

に冠氏の大滝発見、

「高さ数百メートル」

との新聞記事が出

た。また一九三一年

夏から秋に日本電力

が大滝の測量を行

い、三段、上からそ

れぞれ約四、五〇尺、

一五〇〜一六〇尺、

一二〇〜一三〇尺と

のうわさであったと

いう。

測量に従事した人夫の竹山幸右衛門氏を案内人として、一九三一年一月八日鐘釣温泉を出発し、十字峽の日電の小屋で泊まった。翌一月九日最下段の滝に至った。左岸

岸壁に二本の鉄線製の縄梯子が残されていたが、一本は落石で痛んでいたので切り落とし、もう一本とロープを使って登ると左手上流側に針金が張ってあり、「それを伝って岸壁をトラバースして下段の滝の方に出たが河岸へ下ることはできなかった。流れの上五、六十尺のところは少しばかり灌木の生えた小さな平があり、そこがこの道の行き止まりであるとのことである。下段の滝口から、四、五十間で中段の滝つぼである。けれども滝が見えない。（中略）滝を見るためには今四、五十尺岩登りをせねばならぬとのこととロープをたよって上った。（中略）中段の滝の全容をながめることができた。しかしこの滝は思ったほど美しい滝ではなかった。高さは下段の滝より高く百五十尺をこえるとのことだが私の目にはかえって低く感ぜられた。そして下段の滝のように一気にたぎり落ちているのではなくて岩床に相当の傾斜があり、それをすべり落ちてくる感じである。そして下の方に岩の突起があつてそれに水がぶつかつて滝の一部がはねかえっている。」さらにわずか上段の滝までは行けなかった。「中段の滝上四、五十間上流の岸壁に一本の赤旗がたっている。私の上がつている五葉松の枝にも一枚の赤旗がつるしてある。」測量時には仙人谷を回って剣沢の二股に下り、下降して上段の滝に出て赤旗を立てた所で、この木の枝の



図1 5月黒部別山側からの大滝、左下に大滝最下段

赤旗と連絡して測量を曲がりなりにとも終わつたのだそう、この付近の測量は全く命がけであったとのことである。「私は木の上へ写真機をつり上げて数枚の写真を撮ったが何しろピントグラスものぞけず、胸にあてることもできなかつたので、後でみるとどれもこれもわずかのことで滝つぼが入っていなかっただけは残念だった。」という。その後十字峽から宇奈月へ帰った。竹山の話によれば、上段の滝は中下段に比べてずっと小さく、三十尺以上、五十尺以下だそう、三つ合せて百メートルをこえないことが確かとなったわけだが、上段の滝の落口から下段の滝の滝つぼまでの落差は二百メートルといつてもよいかも知れぬ。」

塚本氏はこのように詳細に記述していた。運よく竹山という現場に詳しいガイドがいたという幸運もあったとはいえ、このような早い時期によくなしとげたものである。それにもまして、日電の測量隊はよくもまあ貴重なしごとをやりとげていたものだ。当時の山働きをしていた人々の体力・気力・技術のすばらしさには感嘆するほかないが、彼らを率いていたリーダーがよほど優秀な人だったのだろうと推測される。このあと、我々京大山岳部と他のパーティーが大滝に挑戦したわけだが、うかつにもこの記録を知らなかつたので、結果論とはいえ、ずいぶんとむだな労力や推測に時間を費やしたことになる。

残念なのは、塚本氏が撮影した写真や概念図を記載していないことである。他の機会に発表されたのかもしれないが、寡聞ながら知

らない。

京大一九六〇年四〜五月

その後京大山岳部は剣岳、黒部川周辺の山や谷に多くの山行を重ねていた。たとえば一九六〇年三月の鹿島槍岳―十字峽横断―剣岳や、猫又谷、柳又谷、北又谷、小黒部谷などの遡行である。とくに十字峽横断の際には大滝を垣間見たという。そして大滝に直接入って行ったのは一九六〇年からであった。宮木靖雅による一九六〇年四月二八日から五月七日までの山行概要^⑤は以下の通りである。

(ルートなどに関しては、図2を参照。) 上市から白萩川、剣大窓、仙人山から、ガンドウ尾根を東へたどり、大滝のすぐ下流に至る雪渓(これを「滝見沢」と呼んだ)を下り、五月三日に大滝最下段、十字峽往復の後、黒部別山を経て五月七日剣沢二股から大滝まで雪渓を下った。宮木は「川中が急にせばまり傾斜がきつくなつた所で雪渓が切れている。(中略)雪渓の切れた部分はナメ滝になつており、(中略)冠氏はこの大滝を三段あるとされているがこのナメ滝がその最上段のものであるかどうかははっきりしない。しかしこの地点から最下段の滝までの間かなりの高度差があるのでこの間にもう一つの滝のあることも十分考えられる。」と記している。この後大窓より下山した。なおこの時最下段の滝の高さを「約五〇m程」と見当をつけた。

京大一九六一年七月

続いて一九六一年七月一日から七月二〇日にかけて、ガンドウ尾根から南に大滝に向かつて下る大滝尾根を登攀した。宮木靖雅^{⑦⑧}の報告概要を以下に示す。

五月に下りた雪渓に入ってから、大滝尾根の頭(ガンドウ尾根上二一七三・一mの三角点から東に七五〇m、標高二〇〇〇mの独標)から尾根上部の偵察と荷物のデポを行った後、七月一八日より登攀開始。II峰の下三〇mのテラスから最下段の滝落口とその上のナメ滝を見た(図3参照)。II峰からはこのナメ滝の「更にその上の釜が見える。滝自体は右手に曲がっており岸壁のかけになっている。これで下から三つ目まで確認できたわけである。」IV峰、V峰、VI峰の岩稜の岩登りを楽しんで後ヤブをこいで大滝尾根の頭に着いた。

京大一九六二年七月

次に一九六二年七月一日から七月二五日にかけての、安岡良祐^⑨による大滝最下段の登攀記録がある。本山行は読売新聞社の強い要請により、同社の資金援助も受け、カメラマン一名を同行して、大滝の完登も目指すという野心的な山行であった。当時はそろそろ、岩に鑿で穴をうがって打ち込む「埋込ポルト」やアブミを使って裂け目のない岸壁を加工して登る、いわゆる「人工登攀」を行う山岳会も出現してきていたが、我々はそのようなやり方は邪道であり、あくまで最小限の道具のみで自然に手を加えることなく登山すべきだ

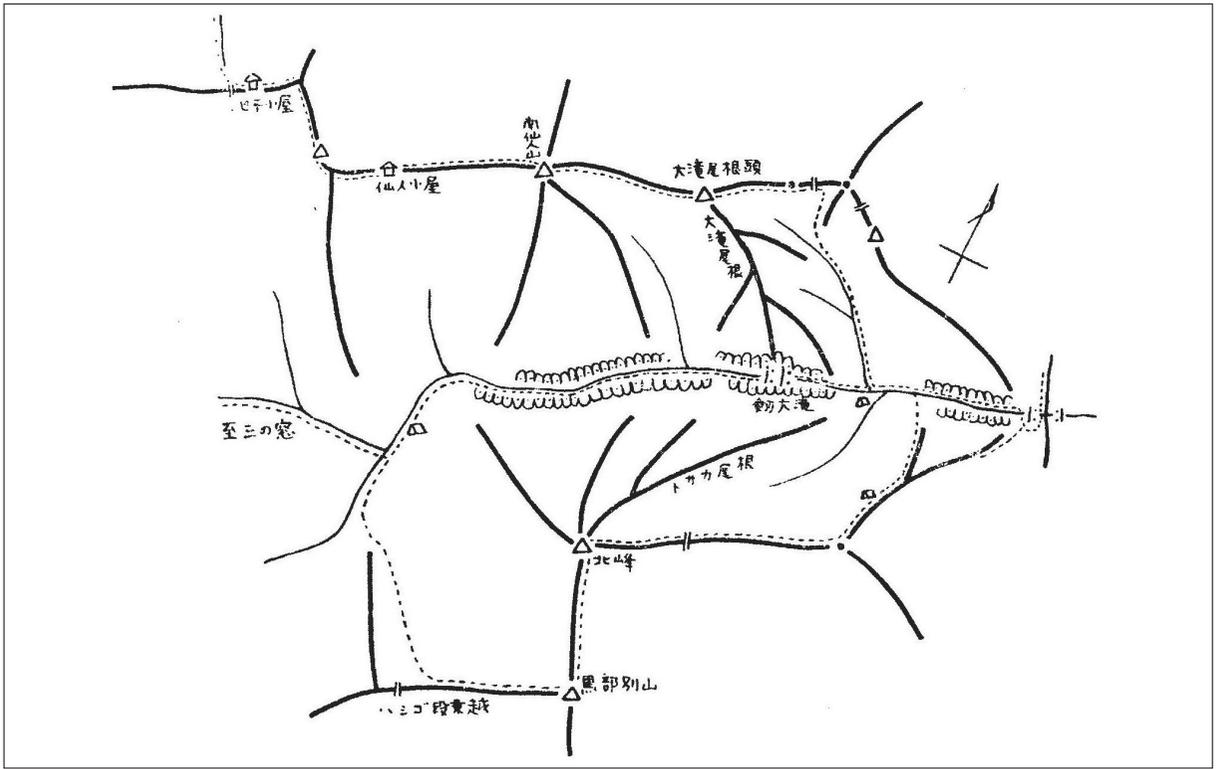


図2 ガンドウ尾根より大滝尾根、大滝最下段へのルート

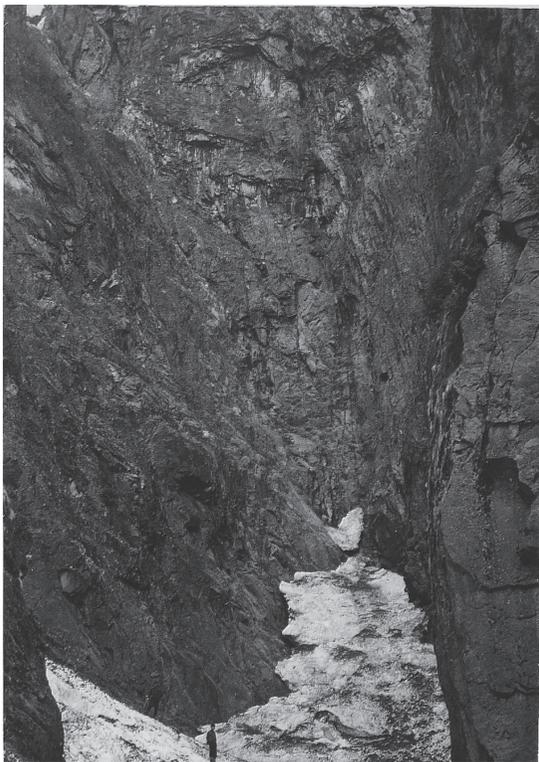


図3 剣沢大滝最下段の滝左岸の岸壁(1961年らしい)

と考えていた。はつきり言つて、そのようなやり方を「石屋さん」と馬鹿にしていたのだ。しかし大滝内部の圧倒的な岸壁に対しては通常のハーケンのみによる登り方では通用しない可能性が高いので、あえて使用しなればならないことも考へて、金毘羅山、ロック・ガーデンでの試用も行なつたが、結局使用はしなかつた。

読売新聞社は事前に全国紙上の社告で本山行を予告し、ある程度の資金援助もしてくれするなど、本計画には大変熱心であった。ただこの時に読売側は、剣沢大滝に対し、「幻の大滝」なる表現を用いた。これはいかにもジャーナリスティックで陳腐な表現で、私としては気に食わなかつた。

実はこの頃山岳部では、以前から二回生が中心となつて進めてきたヒマラヤ遠征計画がやつと実現の運びとなつた。インド政府からパンジャブ・ヒマラヤ、ピルパンジャール山群の未踏峰インドラサン(六二二一m)とデオ・テイバ(六〇〇二m)の登山許可も得て、募金や登攀計画などの具体的準備が始まつていたため、通常の山行計画もやや縮小・抑制的なものにならざるを得なかつたが、この大滝山行だけはそれまでの蓄積もあり、「水曜会」の承認を得られた。これに関しては実は

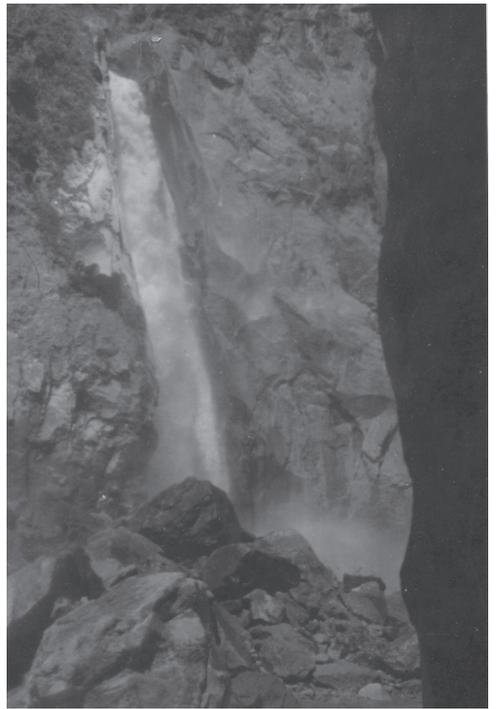


図4 剣沢大滝最下段 (1962年8月)



図5 大滝最下段左岸岸壁 (1962年8月)

現実的なせせこましい事情もあったのだ。今でははつきり覚えていないのだが、当時部費が毎月数百円単位、生協食堂での素うどんが一五円かそこらであったと思う。このような財政状況では、ヒュッテの収入を加えてもハーケン一本、ザイル一本買うのでさえしんどかったのだ。ましてテントなど買ったものではなく、ほとんどの主要テントはA A C Kからのお下がり品で、大型のメステントなどはチョゴリザ、知床で使用されたもので、凍りついた時に運ぶのは大変重くかさばって非常にづらい代物だった。高度成長経済の恩恵はいまだ貧乏学生にまで及んではいなかった時代で、山岳部の財政は常にピンチだった。このような状況下で、読売新聞社が後援の名目である程度の資金提供をしてくれるという話は、部にとっては願ってもないことであった。

滝見沢(図4)を下って、七月一八日に剣沢左岸側にテントを張って大滝に対面した(図5)。前年は雪渓上を簡単に最下段下の右岸に渡ってテントを張れたのに、この年には雪渓はなかったため右岸には渡れなかった。左岸側は垂直の岸壁で滝壺には到達できない。下流側も急流と小滝があつて渡れない。大滝尾根下部を登って左側のルンゼを下りるのも無理とわかり、橋をかけるしか手がないこととなった。一九日いっぱいかかって岩を登り、やっと架橋用の短い二本の松の丸太を切り落とした。しかし翌一日かけても、水量の多い急流と丸太の長さが足りないために架橋できなかつた。二一日に流れの中央にある岩に一本の丸太をわたし、そこから吉野が流れに飛び込んで、少し上流側の岩にはい上がり、そこから丸太をかけて安原が右岸に上がりザイルを張った。これで左岸から右岸まで

間ばかりかかってしまった。さらに滝の高さを三角測量できたが、約三八mで思いの他の低さであった。二三日晴天となり、吉野と安岡がいよいよ左岸の壁にとりついた。岩や草つきが交錯している壁なので、吉野は地下足袋、安岡は登山靴で、一〇時から登りだした。登攀ルートは図7を参照してもらいたい。最初のピッチの短い凹角に少々手こずった他はズルズルの岩の草付きがいやらしくらいで、難しい登攀ではなかつた。驚いたのは、最後のピッチ(図7中FとGの間)で一五mほどの黒さびの針金とそれを止めているボルトを見つけたことだった。三〇年前に日電の測量隊が取り付けたものであることはまちがいない。大変しつかりしていて、まだ十分頼りになるものだった。そこから三〇m左上して小さな檜に達した時はすでに一六時前になっていた。さ

チロリアン・ブリッジで渡れることになった。また滝壺の下を吉野と安岡が徒渉してフィックス・ザイルも張られた。作業の困難さと水しぶき、雨のために胴震いがするほどの寒さで、途中何度も休んでは体を温めなければならず、時

らに四〇m っぽいザイルをのばして、巾一〇m、長さ三〇m ほどの大テラス(図7中のG)に吉野が着いた。ここには古いたき火のあとがあったので、ここを「日電テラス」と名づけた(しかし、このあとまもなく鳳翔山岳会が「たき火のテラス」と称して私たちより先に発表してしまった)。吉野は容易にテラスの末端に達し、最下段の滝落口からの上流側を見た(図6)。

「テラスの末端(上流側)に着く。見えた! 三〇m はあると思われるいくらかナメ状の美しい滝と、それより高く上がる噴煙が目飛び込んでくる。三〇数年ぶりに近々と人間の目にふれる滝である。周囲はほとんど垂直でつるつるの壁が数百m、両側から押しあうように狭まり、すでに夕方であるので陽射しも入りこまない。滝を見ているというものでない。ただ滝があるのだ。自分は全く別の世界をのぞき込んでいるような気がして茫然とし

ていた。心配したのだろう、安岡がザイルを引張ったのでやつと我に返り、写真をとりまくった。日電人夫も塚本氏もここからの写真を撮れなかった筈だ、と思うと少し興奮してきた。滝の下に滝壺が見えるが、どうもナメ状の滝のものではないらしい。必死にそれを確かめようとしたが岩にかくれてとうとう見ることができなかった。又その滝壺からは水流が一気につつ走っていて、最下段の滝の上の滝まで続いているらしい。」(図8)。

結局橋かけに四日もかかってしまったために、肝心の大滝登攀にはこの日一日しか使えなかったのは、いかにも残念であった。せつかくないの金を出してポルトまで買って(この頃は通常のハーケンは何倍もの値段だった)練習までしたのに、と悔しかったがしかたない。なお、図6の「草付きのテラス」としたものは鳳翔山岳会が「緑の台地」と称したものである。



図6 剣沢大滝たき火のテラスより上流の草付きのテラスの滝の水煙

二五日仙人小屋に帰り下山した。高岡市の読売新聞本社で座談会形式で報告をして、これは全国に配信された¹⁰⁾。しかしその時、我々の入山の時朝日新聞社が、当時日本に一機しかなかったジェット・ヘリコプターをチャーターして、二段の滝が写っている大滝の写真を写真ニュースとして七月二三日にスクープしていたことを知った¹¹⁾。そういえば入山時にヘリが飛ぶのを見かけて、なんだろうと思っていたのだ。それにしてもいくら競争の激しいマスコミ業界だとしても、そのアフターな取材には腹が立った。それまでは朝日新聞と言えば日本の良識を代表する新聞社だと思っていたのだが、これですっかり幻滅した。大滝のすばらしさを汚されたようにさえ思った。

この山行では、まったく新しい発見ができたとはいえず、先人の成果をなぞる結果になったわけだ。少し残念ではあったが、これでさらに大滝の全容解明と完全遡行の可能性は見えてきた、と先に希望をつないで帰京した。

なお、この時の写真は整理して、ACK Homepage²⁾に掲載した。

鳳翔山岳会一九六二年九月一〇日

再び大滝に戻る。安久一成氏¹³⁾によると(なお、本記録の転載についての許可を取っていないので、ここには写真と図の転載はしない。末尾の「引用文献・参考文献」で検索していただきたい)、氏が最初に試登を行なった時は大滝尾根を下って最下段の下に達したとの



図7 大滝最下段左岸壁登攀ルート



図8 剣沢大滝緑のテラスとその下の滝、たき火のテラスより (1962年8月)

ことである。しかしその詳細については、私は知らない。もしかすると、鳳翔山岳会⁽¹³⁾には記載があるのかもしれないが、この文献は今私の手元にはない。

さらに安久氏⁽¹⁴⁾によると、一九六二年九月二四日から一〇月三日にかけて、鳳翔山岳会はリーダー・中野満氏以下四名で、十字峽から剣沢を遡行して最下段から一〇分ほど下にテントを張って登攀にかかった。途中一部分を高巻きしてカットしたものの、大滝の全容を明らかにした。それによると、「大小合わせて九段、落差約百四十メートルであることが判明した。」とのことだった。また彼らは、最下段の滝の高さを我々の測量結果に従って三八mとしている。彼らの「たき火のテラス」と呼ぶ台地のふちからF滝(三m)、G滝(七

m)を確認した。俯瞰図にはこの下にH滝(二〇m)、I滝(最下段三八m)がある。埋め込みボルトを使用して一〇m懸垂下降して上流にトラバースすると三〇mのD滝が見えた。三五mで次の中継地、一三mさらに一〇m下り、F滝は三m、目の前に一〇mのE滝を見ながら登攀、四〇m斜め左に登り「緑の台地」に着いた。台地左端のリッジから真上の急なガリーに入って三ピッチで左の岩稜に移る。また二ピッチ登り岩稜を離れ一五mトラバースして、計五五m空中懸垂下降をまじえてD滝落口に導く尾根に下りて、さらに五〇mブッシュ帯を下降してD滝落口に立った。上流側に二mのC滝、一五mのB滝、七mのA滝を確認した。ここからは小さな尾根にとりつき、B滝の左岸上にのびる急な尾根

に登り、下流側に向かい、「トサカ岩」から大滝尾根支稜の下流側を下って、最下段下のベースキャンプを撤収した。A、B、Cの滝の横を上流に上ったわけではないが、彼らの登攀により、大滝の全容は解明されたとしてよいだろう。すべてで九段、落差約一四〇mであることがわかった。

くやしかったが、「石屋さん」に軍配が上ったのであった。

大滝内部偵察一九六五年八月

せっかくここまで手掛けた大滝をこのまま終わりにするのはいかにも残念であった。そこで再度の大滝登攀を計画した。しかし事情が許さずに本格的なパーティーを組めなかつたので、偵察行という形で、しかし従来とは

一部は抜けかけたりして使えなかった。「緑の台地」はデブリの下に埋もれ、E滝は雪溪の下、D滝は流れていた。C滝は雪溪の下に見えた。

八日、「緑の台地」から雪溪上を右岸側に渡り、D滝の右岸を人口登攀で落口まで登り、C滝の右岸をトラバース。A、Bの両滝は雪溪の下だった。二股手前まで三か所悪かった。翌日二〇分で二股、次いで御前小屋に着き、下山にかかった。

ハーケンは三二回使用、ボルトは三〇本残置したとのことだった。剣沢の雪溪は年によってかなり状態が異なると思われるが、この年は雪溪をフルに使えるよい時期を選んだ登攀であったと思う。

志水哲也¹⁸⁾ 一九八八年

登山家・山岳写真家の志水氏による単独踏破の記録。つい最近も何回かNHK BSで再放映されている。

引用文献・参考資料

- (3) 吉野熙道・上田豊・木村雅昭・島田喜代男：「ガネッシュの蒼い氷」、朝日新聞社、東京、1966。
- (4) 冠松次郎：「黒部溪谷」、朋文堂新社、東京、1967。
- (5) 宮木靖雅：「剣沢大滝」、(京大山岳部報告第6号・1961年12月刊) 1960.04.28—05.07 (一) 田村孝夫、安原啓示、宮木靖雅
- (6) 塚本繁松：「剣の大瀑行」(1932.05.18)、『

諏訪多栄蔵編 現代登山全集3「剣立山黒部」、東京創元社、東京、1961。

(7) 宮木靖雅：「再び7月大滝を訪ねて」(京大山岳部報告第6号・1961年12月刊)

(8) 宮木靖雅：「剣沢大滝(大滝尾根登攀記録)」(京大山岳部報告第10号・1962年12月刊) 1961.07.11—07.20 (一) 安田隆彦、富田

幸次郎、宮木靖雅、岩瀬時郎

(9) 安岡良祐：「剣沢大滝」(京大山岳部報告第11号・1964年3月刊) 1962.07.14—07.25 (一) 安原啓示、吉野熙道、安岡良

祐、山本武久、野沢正英(読売新聞社)

(10) 読売新聞：「幻の滝」を踏破して」1962年9月29日

(11) 朝日写真ニュース：「絶壁に切り込む『幻の滝』」朝日新聞社、大阪、1962年7月23日

(12) 吉野熙道：「剣沢大滝」AACK Homepage

(13) 鳳翔山岳会：「幻の大滝を探る」：山と溪谷 286号・1962年12月号

(14) 安久一成：「剣沢大滝 落差百四十メートルの幻の滝群」(鳳翔山岳会：<http://www.geocities.jp/Outdoors-Mountain/4753/hsk4m.htm> 1962.09.24—10.03 (一) 中

野満(アタック) 鈴木鉄男、安久一成、(サポート) 飯田平八郎、野村彰男

(15) 林克：「剣沢大滝偵察行」(京大山岳部報告第14号・1967年5月刊) 1965.08.21—08.29 (一) 吉野熙道、林国克

(16) 吉野熙道：内蔵ノ助平、黒部別山より剣沢大滝往復(報告のない個人山行) 1968年4月—5月 (一) 吉野熙道、栗田靖之

杉山隆彦、安岡良祐

(17) 片岡泰彦：「剣沢大滝 完全廻行」(大阪市立大学山岳部：<http://www.ocuac.org/domestic/domestic-record/1975turuugi/1975turusawawa.htm>) 1976.05.03—05.09 (一) 和田城志、片岡

泰彦

(18) 志水哲也：「黒部 幻の大滝に挑む」<http://archives.nhk.or.jp/chronicle/B10002200090401030030019/> 2004.01.02 放映：NHKアーカイブス保存

番組

番号

筆者より訂正とお詫び

前号の二七頁、インドラサンの記述に隊員富田幸次郎氏の名前を書き洩らしておりました。また二八頁および三一頁、本多勝一氏を本田と記載しておりました。これらは私の不注意からの誤りで、本多勝一氏、故富田幸次郎氏およびご家族の方に心からお詫び申し上げます。

また、二八頁の西イリアン遠征隊の構成の記述のうち、隊長は加藤泰安氏、安江安宜氏が副隊長、探検部からは三名の参加と訂正いたします。

次号のお知らせ

次号62号は九月初旬発行予定です。サルトロ・カンリ初登頂五十周年記念特集を企画しています。投稿の締切は7月20日です。

図書紹介

「梅棹忠夫―未知への限りない情熱」

藍野裕之著、山と溪谷社、

二〇一一年、三二〇〇円

平井正二

五〇〇頁におよぶ大冊である。筆者藍野は一九九四年から民博に通つて、梅棹から彼の幼年期から晩年までのすべてを聞き取り、それをまとめた。著者が「それまで梅棹と全く共有した時間をなかつたために、親しい人との間では語り尽くされていて話題になることもない話もきくことができたことは幸いであつた」と書いているように、我々の間ではよく知られている話のほかにも新鮮な話も多く、興味ある内容である。

内容は一〇章で、京都、三高山岳部、京都探検地理学会、西北研究所、ヒマラヤ、AACK、東南アジア、京大人文研究所、日本万国博覧会、国立民族学博物館などの章にわけ、その組織の中での梅棹の活動について書いている。それも単に社会背景や活動の事実を書くのではなく、梅棹の語りを文章化して話を進めている。その語り口から梅棹の世界観や登山観をすることができてたいへん興味深い。この語り口の文章化こそこの本の大きな特徴となっている。

たとえば梅棹の三高時代、白頭山から北面の匪賊の横行する森林地帯に入り第二松花江の源流を発見する活動は本で読んでよく知っ

ているが、「……白頭山の北面を見たときの感動は、いまでも本当に忘れません。大感動です。(中略)行くぞーって、全身に勇気が湧いてくるという感じです。極端なことをいうたら、そこに飛び込んでいく人類最初の人間だという感動ですな……」。また冬の樺太踏査隊に参加など探検を志すときは「ワトキンス何するものぞ、おれたちもやつたるぞ、と……」(ワトキンスはイギリスの若い探検家、北極海で遭難死亡)というような表現がここかしこにあり、まさに梅棹を目の前にしているような気持ちになる。こういう語りから、未知への限りない情熱が、後輩に知らず知らずのうちに醸成されていくことが分かる。

三高時代の梅棹のノートが一〇冊あり、それを見せてもらった著者が抜粋して語るのに興味深いものがある。三高時代に落第したときの内心の葛藤や精神状態、友人関係など、また「高きを求めるとともに、遠きも求めて」北海道、東北に旅した話貴重な記録もある。密着した取材の成果であるが、そこまで取材を許された著者の熱心さと誠意のおかげで、梅棹の内面を知ることができるのは幸いである。

梅棹は川喜田とともに、三高のときに山岳部のほかに、文化団体としてアジア研究会を創設したことは余り知られていない。大陸の探検を志す団体である。当時は登山も鍊成登山など戦争色の濃いものになっていったが、梅棹らは当時からすでに中央アジアにロマンを求めていることが分かる。

このノートに限らず、今西との関係を築き探検をすすめるくんだりや、加藤泰安などの先輩との話、探検地理学会の成立の経過、張家口にできた今西を所長とする西北研究所の成立の経緯、さらにはあまり知られていないが、今西と同期の佐島敬愛の話など、よく調べて書いてある。

「なぜ京大に野外科学が根づいたかは、今西さんの功績が大きいな。何度も何度も組織をつくつた。大物教授を口説いて組織の頭にすえ、登山も探検も全学的なものにしてしまった」と京大が探検大学といわれる歴史を書いているが、ここに限らず、梅棹と並んで今西の偉大さが随所に語られている。

紙数の関係で本の内容をすべて語ることはできないが、本書は、その副題に「未知への限りない情熱」とあるように、常に未知を目標とした登山探検家であり、偉大な知識人であつた梅棹の生涯がわかり、我々に未知の世界に対する情熱をたきつけてくれる好著である。

AACK ニュース

松尾稔氏が瑞宝大綬章を受章

一九六九年ブータン学術調査隊の隊長として活躍された、名古屋大学名誉教授松尾稔氏が今春、瑞宝章の最高位である瑞宝大綬章を受章されました。永年の研究、教育への貢献に加えて、土木会会長、名古屋大学総長を務められた功績によるものです。

事務局報告

【理事会議事録】

日時 二〇一二年五月二〇日(日)

午後一時から午後二時五〇分

場所 京都平安ホテル 京都市上京区烏丸通
上長者町上る

議事の経過および結果

会長松林公蔵が議長となり、審議に入った。
二〇一一年度事業報告、収支決算の提案に対して理事全員からあらかじめ文書での同意があったので、定款三八条に基づき決議とみなすことが説明された。

以上をもって議案すべての審議を終了したので議長は閉会のあいさつを述べ、散会した。

【総会議事録】

日時 二〇一二年五月二〇日(日)

午後三時から午後五時

場所 京都平安ホテル 京都市上京区烏丸通
上長者町上る

正会員の総数 二三四名
出席者数 一五九名

(うち委任状出席二二名)

議事の経過および結果

上記のとおり定款所定数の出席があり、本会は適法に成立したので、会長(代表理事)松林公蔵が定款の規定により議長となり、議事録署名人に吹田啓一郎、竹田晋也の両名を

選出したのち、下記議案の審議に入った。
第一号議案 二〇一一年度事業報告および収支決算について

担当の者より二〇一一年度事業報告および収支決算について報告があり、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認可決した。

第二号議案 二〇一二年度事業計画および収支予算について

議長は原案について担当者に説明を行わせ、これを議場に諮ったところ、満場一致で原案どおり承認可決した。

報告事項

一 新入会員(小阪健一郎氏)の入会について

二 一般社団法人移行後の対応について

三 A A C Kアーカイブス事業の進捗状況について

四 「一般社団法人京都大学学士山岳会特任副会長ならびに特任理事に関する内規」の制定について

以上をもって本総会の議案全部の審議を終了したので、議長は閉会のあいさつを述べ、散会した。 以上

会員動向

訃報

会員異動

発行日 二〇一二年六月末日

発行者 京都大学学士山岳会 会長 松林公蔵

発行所 〒六〇六八五-一

京都市左京区吉田本町(総合研究二号館四階)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究

研究科 竹田晋也 気付

編集人 前田 司

製作 京都市北区小山西花池町一―八

(株)土倉事務所